もうどうにもとまらない

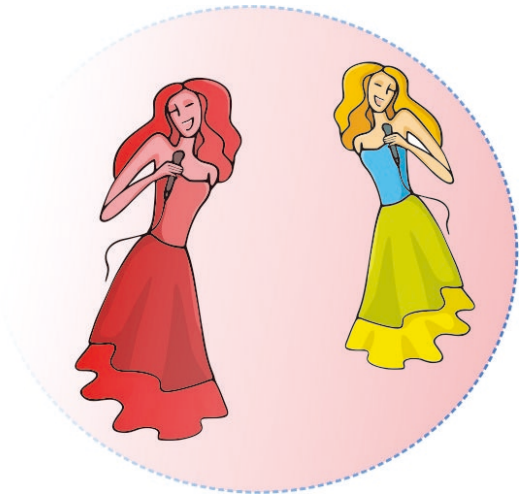
関西大学　社会安全研究センター　小澤　守

先ごろたまたまつけたテレビで，皆さん周知の『徹子の部屋』に山本リンダが出演していた．なんでも古希とか，気が付けば筆者とほとんど同じ年であった．そこで久しぶりに彼女の持ち歌である『どうにもとまらない』を聴いた．そして，オリンピック・パラリンピックの開催を思った．

現在，2021年6月末．行政，組織委員会はなにがなんでも開催すべきと“暴走”している．このパンデミックのなか，国民の声には耳を傾けない一方，開催は国民を元気づけるためとのこと．ワクチン接種を急いで国民総抗体状態を実現し，パンデミックを収束させてオリ・パラを迎えるとの算段らしい．この稿が皆さんの目に触れる折には時が経って，すでにオリ・パラは終了しており，感染の再拡大の懸念が杞憂であったか，はたまた海外からの数万人の入国によって変異型など各種のタイプの新型コロナウイルスが蔓延し，大変なことになっているのか，はっきりしているだろう．そんなタイムラグがあるのにこのような記事を書くのはある意味冒険で，場合によっては筆者の見識のなさを露呈することになるかもしれない．しかしそれでもやはり，書かずにはおれなかった．

さて，朝令暮改を嫌う国民性を反映してか，引くに引けないだけなのか，4年に一度をアスリートのみならずすでに1年延期された国民が待ちに待ったとして，オリ・パラをどうしても開催したいような政府，組織委員会．そこに向けて感染症対策の専門家有志が「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催に伴う新型コロナウイルス感染拡大リスクに関する提言」を出した．政府のコロナ対策分科会の長も務める尾身茂氏が，有志代表という立場で記者会見に臨んだ折の「『感染症対策のプロフェッショナルの責任』としてこの提言を行った」とのコメントが非常に印象的であった．逆に，開催予定日1か月前の時点でも，さる高名な大学の教授が「今頃出しても遅い」と批判したのには驚いた．有志諸氏，とりわけ分科会のメンバーは一昨年以来の感染症との戦いにおいて様々な施策を議論し提案してきたはずで，とはいえ，政治的判断の名のもとにそれらは必ずしも採用されず，おそらくもんもんとした思いを抱えてきたに違いない．ぎりぎりの段階での決心の結果があの提言ではなかったかと思う．

今は亡き，筆者の師匠である石谷清幹先生は昭和44年3月に研究室を出ていく卒業生に対して技術者の社会的責任について説き，「一般人の理解しえない特殊な専門をもつ人が，一般国民に対して負う責任は必ずしも企業に勤務する技術者だけの特殊な責任ではない．弁護士，医師，教師，科学者など，一般人から見て専門家といわれる人には，すべて一般人に対してその専門の故の特殊の責任がある．一般人の予測できる範囲をはるかに超えた問題によって一般人が被害をこうむるとすれば，それは国民にとっていわれのない被害といわざるを得ない．これを国民に対して警告する責任は，どこまでも専門家のものである．」と述べている．先の有志諸氏は，「もうどうにもとまらない」と見えるオリ・パラに向けて，どうしても開催するならせめてこれだけは実施してほしいとの切なる警告を発したのであって，まさしく尾身氏が述べたプロフェッショナルの責任の一端を果たしたと思う．

政府のオリ・パラにおける対策の重要施策は水際での防止とバブルとかいう隔離策であるようだが，その作戦もすでにほころびが出ている．厳格な強制力を持たない現場が先乗りも含めれば非常に多く，オリ・パラの関係者と一般市民を見えない膜で覆うことなどできるはずもなかろう．海外からの来客を完全隔離し，一切日本国民との接触も厳禁するとしても，実施にあたって協力するボランティアや運営関係者など，海外からの参加者以上に多くの人達がバブルの境界面を通じて絶えず行き来するのだから，バブルがはじけ飛ばないわけがない．膜の表面張力で形状を維持しているシャボン玉が，周囲の状況，内部の状況によってはじけ飛ぶことなどは周知の事実である．だれが名付けたか知らないが，バブル（気泡）の本質が分かっておれば，こんな命名はしないだろう．いやもしかすると，皮相的に見れば，はじけ飛ぶのを意識しての命名だったのかもしれない．

個人の自由と基本的人権を尊重し，なおかつオリ・パラの機会に海外の人達との交流をと願う気持ちも理解しないではないが，なにがなんでも開催するというのであれば，せめて有志の声に耳を傾けるのが肝要だろう．感染しても感染させても，人類の平和の祭典には決してならない．山本リンダが歌う，「はじけた花火にあおられて　恋する気分がもえてくる　真夏の一日カーニバル　しゃれて過ごしていいじゃない」では済まないように思うのだが．ああ，不安と懸念が「もうどうにもとまらない」．